

ジェイムズ・ジョイス 『フィネガンズ・ウェイク』 第1部第2章の概要 (30.1 ~ 47.29)

著者	大島 由紀夫
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	15
ページ	37-48
発行年	2019-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00001659/

[資料]

ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』 第1部第2章の概要 (30.1~47.29)

大島 由紀夫*

(Accepted November 30, 2018)

The Epitome of James Joyce's *Finnegans Wake* I, 2

Yukio OSHIMA*

Abstract: I translated into Japanese James Joyce's *Finnegans Wake* I.2 (30.1~47.29). In some parts I translated it word for word, but in other parts I just gave the gist of the sentences or the paragraphs. So in naming the title I used the word 'epitome', not 'translation.' This chapter treats the origin of H.C.E.'s nickname 'Earwig', H.C.E.'s confession to Cad about the rumor that he had a stealthy glance at the girls' urination, and the wide spread of the rumor, which are the fundamental episodes of the story about H.C.E (and A.L.P).

Key words: *Finnegans Wake* Part I.2 epitome

さて(アイリス・トゥリーズ【アイリス・トゥリーはイギリスの女優名】とリリー・オランガンズ【オレンジ・リリー・オーは歌の名前】の話について述べるのは、永遠に控えようとは思っていない)、ハロルド、即ちハンフリー・チムデンの、職業に由来する添え名の発生に関心をもち(我々は名字が生まれる以前の、数字が使われる前の時代、言うまでもなくまさに人々が丘の上を切り開いていた時代に戻っている)、次のような諸説、即ち、マンフッド郡のサイドルハムのグルー家、グラヴィー家、ノースイースト家、アンカー家、エアウィッカー家といった重要な先祖と彼を結びつけようとする昔の資料、そしてまた郡を建設し、そのヘリックあるいはエリック【といった郡】に定住したヴァイキングの末裔が彼だと主張する昔の資料を元とした諸説を退ける、最も権威ある書であり、ホフェド・ベン・エドガー【ダニエル・デフォーの事】が読んだ書としても親しまれているタムルードは、事情は以下のとおりであったと述べている。人々の話によると、まず始めに、

老いた偉大なる園丁のハグ・チヴィチヤス・イブ【H.C.E】は、盗人のキニキナトゥス【古代ローマの将軍】のように、ある蒸し暑い安息日の午後、墮落前の楽園の憩いの時に、昔からある大衆のための施設、即ち、海辺のホテルにあるバブの、その奥の庭のアカスギの下で、鋤を使って根菜を掘り起こすことにより夏の日照りを有効に使っていたのだが、この時伝令によって、国王が街道沿い——そこでは余暇を愛する雄狐が、群れをなした雌のコッカースパニエルに歩くペースで追いかけられながらも、匂いをたどって獲物を探していた——で愉快的気分で立ち止まったと伝えられた。行政長官に対する部下の忠誠心以外のことを全部忘れていたハンフリーあるいはハロルドは、輓につながれていた訳でも鞍に乗っていた訳でもなかったが、つまずいて顔をひりひりさせた。というのも彼は、トーピー帽【ヘルメット形の日よけ帽】、帯、クサネム【植物の1種】のスカーフ、ブレード【スコットランド高地人の肩がけ】、プラスフォアーズ【半ズボンの1種】、撒きゲートル、燃

*Professor Emeritus of Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT), 2-1-6, Etchujima, Koto-ku, Tokyo 135-8533, Japan (東京海洋大学名誉教授)

える様な色の泥灰土がついた、代赭石で赤くなったブルドッグブーツを身につけ、[31]通行料取り立て所の鍵をジャラジャラ言わせ、口を下に向けた植木鉢を上部に慎重に取り付けた長い竿を、この狩猟者一行が持っている不動の槍の間で高々ともち上げながら、彼のパブである裁判所へと（コートポケットから汗にまみれたハンカチをダラリと垂らしながら）急いでいたからであった。元気溘刺とした若者の時から目立って遠目がきいた、いや度々遠目がきく振りをしていた国王は、実のところ、何故この街道が穴ぼこだらけなのか尋ねるつもりであったものの、実際にはその代わりに、【H.C.E.がもっている竿よりも】ロザリオ式釣り糸と毛鉤の方が、ロブスターをとらえるのに格好のおびき寄せの道具ではないかと尋ねた。そうした国王に対して、正直で無愛想なハロルドハンフリーは、国王と同じまさにはっきりとした口調で、恐れなき顔で、いや、国王閣下、これは単にあの嫌なハサミムシをとるためのものですよ、と答えたのであった。我らの船乗り王は、恵みであり供え物でもある、見てそれだと分かるアダムの酒【水】を冷まし瓶から喉へ流しこんでいたのだが、この言葉を聞いて飲むのをやめ、彼のセイウチ髭の下から本当に真心のこもった笑みを見せ、征服王ウィリアムが、大叔母ソフィーから受け継いだ遺伝性の白い髪の毛と指の短さとともに母系から受け継いだ、あの決して温和なものではない気質を見せながら、2人の重武装の随行者、高貴な家柄の出であり、レイクスとオフアリー【最初のアイルランドのプランテーション】の領主であるマイケルと、【生誕】50年目の記念日を迎えるドロヘダの市長エルコックの方に体を向けた（この2つのショットガンは、クロンマイクノイス出の博学の学者であるキャバナンが後に唱えた説によると、ウォーターフォオードの初代行政長官マイケル・M・マニングと、ジュビレイという名の閣下と呼ばれるべきイタリア人であった）。この2人はどちらも、教義の純粋さや仕事の恒常性や毒人参の解毒用パッチの象徴となっている、教区の司祭を輩出した典型的な宗教的一族に属していた。国王はゆっくりとした口調で2人に次のように言った。サンデュペールの聖なる骨よ、もし通常この上なく信頼出来る執行官の管轄地に、ハサミムシ取りとなっているのと同じくらいの頻度で、それと交代で道路管理者になっている者がいることを知ったら、ポメラニア【ドイツの州名】にいる我らの放蕩な兄は声を立ててどんなにか怒ることだろう！ というのも、この兄は極めて陰鬱な邸宅をもったジョン・ピルや、家の中で彼が朝よく行く場所を知っ

ていたからだ【「極めて」から「知っていた」までは、Do Ye Ken John Peel?という歌の歌詞のもじり】。（聖なるパトリック夫人が植えた道路脇の木々の間で、石ころたちの楽しげな、日本人のように押し殺した笑い声が未だ聞こえ、そしてこの石ころたちの沈黙の固まりが、すべて次のようにあざけているように感じられる。俺たちにとっては度を越して面白いことだぜ、と。）ここで問題となるのは、擬人観的な、相対応している2つの逸話の両方もしくは片方が記録している、そしてまた賞賛している、彼【H.C.E.】の一族の名前に関わるこれらの事柄が事実かということだ。これらは正しい箇所もあれば間違っている箇所もある預言の中に読み取るような情報なのだろうか。その【真実に至る】道筋にはいかなる汚物も落ちていないのか。[32]そして今の位置はネヘミア記のような位置であろうか。そうなのか、王よ、王となりうる支配者よ。おそらく我々が知るのはいさぐさではないであろう。香しい香りを漂わせながら王権を持つ者がいる、営業許可証を手に入れようとしているあの酒場を探し出せ。英知の子よ、もしあなたが狂気の中に論理をもっているならば、この男が山岳であり、変化し上昇する存在であることを肝に銘じておけ。厄介であると同様背信的な、人の心を惑わす虚偽の話は脇にのけておけ。とどのつまりこの話をしたのは、王自身ではなく、王とは切っても切れない関係の彼の姉妹なのだ。彼女らは御しがたい、夜のおしゃべり屋、ドニアザードとシェヘラザードなのだ。後に彼女たちは、盗賊たちが社会の啓蒙者たちを撃ち殺している時に、世の中に芸人として出てきて、マダム・サッドロー【レシー・サドローは、ゲエティー座の支配人マイケル・ガンの妻】の力でローザ・ミスタンゲット【ミスタンゲは20世紀のフランスの女優兼歌手】、リリー・ミスタンゲットとして、2人のピット的人物ミリオドロス【ギリシャ語で1000人の少女の意味】とガラテ【ガラテアはギリシャ神話の海のニンフの1人】が後援したパントマイムの舞台に上がったのだ。重大な事実が明らかになっている。あの歴史的な日の後から今までに掘り出された、ハロンフリーというイニシャルのついたすべての自筆文書には、H.C.E.のシグラがついているということだ。彼は仲間にとって、ルーカンやチャペリゾッドにいる空腹で痩せた労働者たちの味方であり、唯一の長期にわたる常に善良なる公爵ハンフリーであった一方で、同じくらい確かなことだが、この標準的な文字が生み出す意味合いとして、「万人ここに来たれり」【Here Comes Everybody】というニックネームを彼につけたのは、民衆の楽天性であ

ったのだ。実際彼は常に堂々とした万人であるように見えた。そうした彼は、絶えず本来の彼と同一であり一致していて、このようにどんなに普遍化されても、その万人という普遍化に値する人物のように見えた。このように見えるのは、真のカトリック教徒が、最初の好ましい場面から最後の幸福な場面に至るまで皆一斉に拍手を送るために（彼の人生についてのインスピレーションの元であり、彼らの生き方についての批判の元でもある）、フットライトを下から浴びて輝く悪魔のキングズ通りの劇場【ゲエティー座】に、ロバが啼く草原や牡牛が群れをなしているところから集まっている中、敬虔な目的のために、特別な要請により、思いやりある許可を得て、ウォーレンスタイン・ワシントン・センパーケーリー氏率いる不滅の移動歌劇団が、創作されてから長い間演じられている、情熱を扱った世紀の問題劇『王の離婚』の111回目の活気溢れる御前上演——この劇がクライマックスに近づいた時には、『ボヘミアン・ガールズ』と『百合』から抜粋された、すべてのホースショーの御前上演の夜に奏される間奏風の楽団演奏がなされる——を行うのを、絶えずこの頭のおかしい連中は**大目に見ておけ！とかその白い帽子を取れ！**というわめき声を前にし、**彼奴の酒を止めろとか日誌に書いておけとか金は奴の**（バスの音域で）**ブーツに入れておけ**という言葉で安堵しつつ、彼が彼の総督席から[33]（彼のボルサリーノの帽子のでっぺんは、幾分かの差しかないが、マクケーブ大司教およびカレン大司教の儀式用の赤い僧帽ほどには高くない）見ている時であった。そしてそうした時には常にそう見えるのであった。そしてその席に、本物のナポレオンN世のような人物は、世界を舞台としている、実際に冗談の的となる人物として、また引退したそれなりの力を持つケルトの喜劇役者として、この民衆のこの時代の祖先として、観客全体を引きつけ、一定不変に広がったネッカチーフを首全体、うなじ、肩甲骨に涼しげに巻き、ワイシャツから完全に先祖帰りした、燕尾服と呼ばれている、色違いの細長い布で飾られたディナージャケットの持ち衣装を着用して座り、洗濯仕立ての燕尾服を着ている者たちや、昔からある円形劇場に来て1階上等席に陣取っている、大理石のように白い上着を着た者たちを、あらゆる点で遥かに凌駕していた。上演作品はランプの光を見よ。配役は時計の下【の配役表？】を見よ。女性席の観客へ、外套は置いていくことも可。【劇場の席は】1階前方席、休憩用廊下、1階後方席、立ち見席のみ。常連客が目立っている。

これらの【H.C.Eの】人格に下劣な意味が読み込まれてきた。その文字通りの意味合いは間違いなく上品さを醸し出すことはない。彼がいかかわしい病にかかっているという話を、ある皮肉な冗談を飛ばす連中は漠然と口にしてきたのだ（朝の悪臭は、その朝について夜に巡らされる陰謀の中にある）。喘息持ちめ、無作法な奴らめ！ こうした示唆に対するただ1つの真つ当な答えは、発せられるべきではない言葉、そしてこう付け加えることが出来ればと思っているのだが、発せられることを許すべきではない言葉があると主張することである。彼を誹謗中傷する者は、温かな血を不完全にしかもちあわせていない輩であり、彼のことを、ジューク一家やカリカック一家【ともに悪性遺伝の一家の代表格】の不名誉となるような、事件簿に記されたいかなる大罪をも犯しうる、大きな白い毛虫として考えている輩であるが、彼らもまた、民衆の公園でウェールズの火打石銃兵を困惑させたという滑稽な非難を、彼がかつて次から次へと受けていたことをほめめかすことによっても、自分たちの問題を正すことが出来ないでいるのだ。ヘイ、ヘイ、ヘイ！ ホウ、ホウ、ホウ！ 草原の動物も花も、そうしたちょっとした昔の冗談を大いに面白がっている。その長きにわたる総督閣下としての存在すべてにわたって、キリストの様な大きな澄み切った心をもつ巨人H.C.エアウィッカーのことを知り愛していた者にとっては、彼が欲望をあくまで満たそうとし、策謀をめぐらし、トラブルを探し求める者だとほんのちょっとほめめかされただけでも、とりわけ途方もないことのように聞こえてしまう。預言者の髭に賭けて誓われた真実は、我々にこう付け加えさせる。即ち、時々人々の心に上ることがあることだが、[34]その頃ダブリン郊外である人物が（もし彼が存在していないのなら、そのような彼を作り上げる必要があるであろう）、暗い過去をもった口の軽い卑劣漢に出会ったとされる事例が、以前（恥辱だ！ まさに恥辱だ！）あったと言われている、と。この卑劣漢はロマンティックにも無名のままで、しかし（彼は老いた鮭たるアブドラ【モハンマドの父】だと花を添えて言うておこう）伝えられるところによると、自警団の監視兵からの要請で、マロン【ジョン・マロン：ダブリンの警察の警視】のところに派遣されていたらしいこの人物、もつとずっと声高に叫ばれたことなのだが、例えば玉座に座したサルタンに至るような、一見人々を威圧する司令官に見えるこの人物は、数年後に、ホーキンス通りからどこかはずれたところに昔からある教会施設ロシュ・ハドックスで、月の最初に食べるものと

してのキャベツ付きの肉片を待っていた時に、どうやら倒れて死んでしまったらしいのだ（さようなら！ さようなら！）。ろくでなしの嘘つきのローよ、警察の犬小屋でのお前を神は見ていたぞ！ 家で食べるものがお前のこれらの内臓を汚すのを見ていたぞ！ 食事という名誉あるものには、実際馬車1台分の破壊力があるのだ。我らの立派な、偉大なる、並外れている英国南部人、敬虔な創造者たちが自分たちと同種の間人と呼んだ男エアウィッカーを、何人かの森林係員即ち目撃者が、彼がとつたと申し出たあの不適切な行為以上の不適切な行為を罪状としても、中傷は——最も影響力のない状態にしておけ——有罪にすることは出来ないのだ。彼ら見回りたち、おしゃべりのテッドとおしゃべりのタムと二重のおしゃべりのタフィドは、その日イグサの生い茂った窪地で1組の上品なメードたちに対峙し、コーンウィスキーの勢いで、非紳士的な下品な振る舞いをしたことをあえて否定はしなかった。その時その辺りで彼女たちはシャーという音【排尿】を立てていたのだ。このガウンとエプロンを身に着けた2人の女性が弁明したところによると、純粹無垢の自然の女神が、2人をともに自発的に夕刻の同じ時間帯にそこに向かわせたのであった。しかしシルクの服とウールの服を着た彼女たちの、合体して公になった証言は、疑いもなく純粹なもので、この個人的秘密に関わる細かな点については、織物の横糸のねじれのように明確な相違があったのだが、逆方向、つまり逆向きへの【H. C. E.にとっての】最初の一撃となった。この証言は確かに無分別ではあるが、しかし最も意味を幅広くとつても、異常な聖スウィジンの日【この日に雨が降ると、40日間降り続くと言われている】を迎えた夏のような好ましくない状況（緑広がる回廊中庭では、封建領主が少女と結婚する）に関わる部分的な暴露に過ぎなかったものの（ジェシー・ローザシャロンめ！）、更なる暴露を呼び起こす見事な機会となったのだ。

我々は彼女たちなしではやっていけない。妻たちよ、急いで助けに行ってくれ！ 薔薇が赤い限り女は男の元に行くものだ。絡み付き、むしり取ろうとする必然的欲求が我々の学び舎なのだ。すべての友よ、心の備えをしておけ、新しい世界に生きる者よ、肉体派のネリーに対して！ もし彼女がリリス【アダムの最初の妻、魔物の母】のような女ならば、早い段階で【ペニスを】引っこ抜いておけ！ 使徒パウロよ、【男女の結び付きの切断を】許せ！ そして男たちは眨められている。退却せよ、退却せよ！ 彼に掛けられた多くの嫌疑に関して、明確に彼は無罪なのだ。と

いうのも、少なくとも1回は以前の口蓋垂振動音【吃音】の名残りを伴いながらも、明確に自分はそうであると彼は表明したからだ。そしてそれ故それが真実であると我々には受け取られている。[35]人々はこののんびりとした4月13日の朝（彼が最初に誕生の日の装い【裸】をして出現し、人類の混乱に従属する権利【言語】を持った日の記念日）についての話（塩化カルシウムや親水性のスポンジが水を吸収するほどに、聞き手の耳を取り込んでしまうこの合成された話）を話題にしている。不品行の噂が立ってからずっとずっと後のこの日に、万物の中の苦難を背負ったこの友が、虎斑入りの杖で身を支えながら、最も大きな公園の広がりの中を、うねるように、天然ゴムでできた軍帽、見事なベルト、革製のゆったりとした上着、煙草の臭いのする青味がかかったファスチアン織りのシャツ、両側が鉄のようなジャックブーツ、バガヴァドギーター【インドの叙事詩】のように分厚いゲートル、ゴムを含んだインヴァネスを身につけて歩いていた時、パイプをくわえたキャッドに出会ったのであった。キャッドは、栄冠を手にした者というよりは墮天使ルシファーで（ありそうなことは、彼は未だいつも同じ麦藁帽をかぶり、前よりももっと田舎の紳士に見えるように、羊革を外側に出したオーバーコートの小脇に抱え、歩き回り、思い切り陽気に禁酒の誓いを立てている、ということである）、凶々しくもこう呼びかけた。紳士さん、今日はいかがお過ごしですか（当時ダブリンでは、この言葉を初めましての意味で使っていたのであり、私の昔のよき時代の仲間の中で、おどおどしながらこのことを未だ思い出す者がいる）、と。そして、私の腕時計が遅れているので、あなたの時計の恵みによって時間がお分かりになるのなら、何時を打ったか教えてもらえませんか、と尋ねたのであった。明らかにためらいは避けなければならなかった。その明らかさと同じ程度の巧みさで、呪詛の言葉が発せられなければならなかった。その刺激的な瞬間のエアウィッカーは、根本的な自由の原則に基づき、殺人に至るのであれ、傷害に至るのであれ、身体的生命の最重要性を認識したのであった（彼にとって最も近くに置かれている助けとなる中継器は、聖パトリックの日やフェニアン党の蜂起についての情報を、金属音を伴って伝えてくれる騎士【電話機】であった）。そしてこの愚か者によって軟弾頭の弾丸が撃ち込まれ、直ちに永遠の闇に放り込まれるのを望まず、間を置き、機先を制して、絶好調だと答え、合図をしてポケットから、共産主義社会では我々のものとなるが、【資本主義社会では】所有権の時効所得によって

彼のものとなっている、ウォーターベリー産のヤールゲンセン【スイスの時計メーカー】の、時限爆弾につながっている腕時計を取り出した。しかしそれと同じ時に、老いた鐘楼守のフォックス・グッドマンが、斑点だらけの教会の10トンもある、高音を雷鳴のように鳴り響かせる（クーフリン【祖国アルスターを守るために戦死した、アイルランド伝説の英雄】の叫び声だ！）鐘をつき、その音が荒地を渡って南の方角へと進み、激しく吹く母なる東風の甲高い声を越えて彼の耳に入ってきたので、彼はこの冷やかし屋の質問者に、エホバに誓い、恒星の動きにより、またビールを求める喉の渇き具合から言って12時であると言い、しかしまた、イワシの燻製の匂いがする息を吐き（とはいってもこの口臭は、[36]骨、筋肉、血液、肉、活力を得るための、サワー、酢、塩、砂糖菓子、ビターが混合した様な味がする、嚙みタバコとして彼が使っていたことが知られている、箸がつけられたショウガの匂いと混同されるように思われる）、深く身をかがめ、彼が見せた杖に一層体重を乗せて、付け加えて言った。即ち、自分に対する信じがたい非難がなされているのに、事実として知られていたことが、文化的水準の高い地域で、『モーニングポスト』紙に、全く並み以下の人間の皮をかぶった動物、3つの頭をもつ蛇よりも何段階か下等の動物の手を通して載せられたと言ったのであった。自分の言葉をより一層裏付けるものを示そうと（趣をもって、ある有名な言い回しを予感させるものとして、このH.C.Eの話は口語調から、式典的なリズムを持ち、文法に従った穏やかさに包まれた、言語の形式美を意識した言葉遣いへと変わり、それが永遠に持続するよう再構成されたのであった。そしてまたこの時の彼の言葉は、定価1シリング、郵送料無料の、H.C.エアウィッカー名言集として知られている版における、ノア・ウェブスターの連載形式の解説の中で、まるごと引用された）、この垂麻色の髪の巨人は、律動的な音を出すクロノメーターを軽く叩き、すつくと身を伸ばすと、ベルリン製の長手袋を肘のくぼみに挟んだまま（遙か昔からのサインの伝承によれば、彼のこの仕草は **㊄** を意味している）、この場所に隣接する、事件現場の草地に立つ、挑戦相手としての**鉄の侯爵**の、高くなりすぎて不恰好な一里塚【ウェリントン記念碑】を32度の角度で指差し、言葉を用意するために間を置いた後、もったいぶりながらも興奮気味に次のように明言したのであった。あああ握手をして下さい、わわ我が友よ！ 自分1人だったのです。彼らは5人いました。彼奴らは一様に手強い。ちゃんと勝てたのです。そ

れ故国中に広がった私の居酒屋と乳製品加工所が存在しているのです。正直言って、これらを我々おとお互いの娘の名誉のために、私は是非ともやややり抜こうと思っているのです。私たちのすすす救いのあの現れである記念碑にかけて。健やかでいられる日ならどんな日でも今の今までそうしてきたのです。そして私は是非とも誓いを立てて言います。すっかりお話しします。たとえそのために命を投げ出そうとも、開いた聖書にかけて、偉大なる監督者がおおす前で（私は帽子を掲げます！）、神の面前で、そして司教の面前で、英国国教会派のミシヤン夫人の面前で、同様に、以前に申し上げたあの私と一緒に住んでいた人たちの面前で、そうした類のすべての人の面前で、私の支柱言語である英語を使い、またお互いに正義を行使している、どこであれこの世界のあらゆるところにいるあらゆる人の面前で、こう言わせて頂きますが、あの全くのきよきよ虚偽の中にはひとかけらの真実もないのです。

啞然として口を開けていたギル【Gaping Ghyllはヨークシャーにある縦穴】は、早とちりをするも、自らへの管理には厳しい人物故（彼はこの人物がこうなっているのは、[37]思春期後に顕著に見られる下垂体機能亢進症のタイプで、ハイデルベルク人的肉食的洞穴の倫理観を持っているからだ）、耳管を通して【相手の言葉を聞いて】診断した）、斜傾物【帽子】をもち上げ、このスヴィタゴール【キエフの神話上の騎士、巨人】に深く感謝しつつ別れの言葉を言い、感受性の強い人間にふさわしく、この危険な話題の厄介さを考え、デリケートな状況の中で限りなく機転を利かせ、受け取った数ギルダの金とこの日の時刻について礼を言い（同時にこれがすべて、神が定めた時刻であることに少なからず驚いた）、慎ましく道義としてこの親方に挨拶し、啞然として口を開けている自分と形ばかりの言葉を口にする自分との間のギャップを金メッキで埋めようとし、何であれ、たとえそれが遺体に敬礼をすることであろうとも、すべきことをしたのだった。当然のことながら（山のような頭皮とフケの落下が彼の足跡を輝かしていることに関心がいったなら、誰でも彼をその場から追い出したいと思うだろう）、彼が信頼している、歯をむき出しになっている者【犬】を伴いながら。そしてまた、絶え間なく丁寧な言葉——この変人め、あんたに会うのが遅すぎたのだ、でないとしたら、あまりに暖かく、あまりに早い時間に出会ったのだ——を心の中で繰り返しつつ。そして彼はその同じ日の晩、まさに覚えている限りの、この偉大なる時計所持者が口にした、禁じられた多くの言葉同様、

この男が2回目に口にした言葉に痴呆者のタグをつけて、ドルイド教徒と深く眠れる海との間でつぶやき声での対話が始まる黄昏時に、鳥のさえずりが始まる時刻の前に、夕食の時間とシャルタン通りへの思い出が穏やかに重なり、静かに暗くなっていくロイヤル運河とグランド運河沿いで、男と女がいろいろいちゃつき、そしてここ子猫が垣根の中をこそそ動き回り、多くの公園での柔らかなずる賢い言葉に対して、アーヴァンダ川が常に黙認しているもっと柔らかなキスが応え、一方キャッスル・ブラウン【後のクロングウッド校】の生徒たちが辺鄙なところで勉強し、牛の糞が北国で散在している時に、どうだろう、彼は注意深く変節して、**石造りの炉辺の辺り**で、モーゼの分与物

【H.C.E.の言葉】を口から吐き出したのだ。（【キャッドを言い表すのに、】**お気に入ればの話だが**、アイルランドのつば吐き男というのはどうであろう。しかしちゃんとした、特に立派な縁故があり、アングロ系ヨーロッパ人の家系に属し、きちんとした考え方をもち、例えば「ため息をつきませんか氏」とか「嘲笑いませんか氏」といった、正しいことを知っている人物が、ポケットにベルチャー【水玉模様のネックチーフ】を**押し込んでシワシワ**にし、非常に人間味のない言い方で、いやもうたくさんだ！などと吐き捨てるように言うだろうか。唾を吐くように。）この日の体験についての思いに心を満たしながら。そしてこのようになる前、彼は熱々の料理とポターージュの夕食を済ませていた。この夕食を彼は俗物根性を発揮して、熟れた桃とあだ名を付けた（本当はそれは単に、彼が満足し喜ぶことを彼の妻が知っていた、ルーカンでとれるマッシュルームで作ったパイに過ぎなかった）。極上の豆も出てきた。若い雌山羊のミルクの中で煮て、白い麦芽入りの酢の中に移したもので、ちょっとしたインチキな料理で、何とマア、ひどい味がしたが、ネズミがウイキョウを好むように、鼻水を垂らす季節においては彼の好物の料理となっていた。[38]そしてこの幸いにも【H.C.E.から】逃げて帰ってこられた祝うべき日に、酒の力で最高に盛り上がり、この地域の盛り合わせ料理である、中心部が最高に美味い、スペイン産オリーブ付きの、ベンズインの香りが漂う蒸し肉同士（太ったブタたち！）が、1本のフェニックス・ブルワリー98年産【ワイン】を伴いながら、非常に豪華にアラバスク風に結婚し、それに続いて結婚祝いの2次会として、ピーズポータワイン【ドイツモーゼルワインの1種】や特級格のワインが続き、そのどちらもがそれぞれの銘板を大切にしている状況の下（とはいえ、その香りは慎ましく、【連

想させるものは】恋人との別れである）、その両方の頭に蜘蛛の巣が付いたコルクの匂いを執拗に彼はかいでいた。

吐き出したものに対して敏感な耳を持っている（後日談によると）、我らのキャッドの妻は（ひざまずけ、むき出しの膝のマックスウェルトン【スコットランド民謡「アニー・ローリー」中の地名】の者よ）、この後いつものように口のきけない野獣のような夫（お前には桃や杏ではなく、苦いオレンジをくれてやる！）とともに食器を洗っていたが、しかし2日後の晩、自分の夫が彼にとって耐え難いほどの、彼女たち年増の女たちにとっても最早耐え難いほどの、奇妙な赤ら顔になっていた【寝てしまった】が故に、瘦せた長い手に鍵を忍び込ませ、普段の親切心を発揮して、お茶を飲みながら、目を潤すことなく細め、濃密な話し振りで、101件の事柄に混ぜて、ヘゲシプス【古代アテネの雄弁家】のように、このことを、誰よりも一緒に話したいと心の中で思っていた（仲間に加わりなさい！ それだけで十分！）彼女の特別の導師、彼女の導き手に、一文字に結ばれた唇とアニー・ローリー的【親密に語り合う】約束との間で揺れながら（彼女は誰かと一緒に、その小さなくちばしのために、アンニスケリーのプディングを食べないだろうか）、夫の耳元に弾丸のように入り、彼らのアイリッシュシチューに完全に埋もれてしまっている醜聞が、彼のジェズイットの服以上に伝わることはないと思って、漏らしてしまったのだ（男たちの平日の騒がしさの中で、女らしいこの最初のささやき声は、密かなささやき声は、どんなにかすかなものであったことか！）。しかし（ブランドイーの中に真実がある！ 飛んで行って、おさらばだ！）、ラザリスト宣教会会員【17世紀にフランスに設立された伝道修道会の会員】の仮面をかぶった、聖職者のあまりの出来損ないであるこのブラウン氏は、この事実に取り付かれていた時、まさに偶然ノランとしての第2の人格の中にあり、また哀れにも未発育の状態にあったので、偶然——即ち、たとえこの出来事がヒッポ【聖アウグスティヌスのこと】のエリート集団の精神にとって偶発事だとしても、この出来事はイヴの娘たるアンについて書く女性著作者を生むことになる——彼の言葉は、女の打ち明け話（マリー・ルイーザがジョセフィーヌのためだけに言ったこと！）がほんのちょっと変わった形で、間を置きながら、忠誠の誓いの言葉を伴いつつ（私の親しき兄弟よ、私の兄弟よ！）、「彼女の生まれの秘密」の曲に乗って、フィリー・ソーンストンという者によって立ち聞きされ、彼の赤みがかった耳を静かに貫いたのであった。この男は田園に

関わる科学【自然科学】と正しい音声学を教える素人の教師で、[39]年齢は40歳代中頃、頑丈と言うに近い体躯もっていた。この出来事はこの聖職者【ブラウン氏】が、ある日そよ風の吹くボードイル【ダブリンの1地区】の競馬場で、安全かつ分別ある賭けに聖職者なりに興奮していた時のことであった（W.W【Winny. Widge, 下記にある実在の騎手ウィジャーのこと】はあらゆることを考慮する）。国家的出来事を取り上げる者全員と「ダブリン・ディテイル」【ダブリンの競馬新聞のコラム】が、容易にこの時のことを思い出すことが出来る。貴族でありプロレタリアートでもあるパーキン【パーキン・ウォーベックは15世紀のイギリス国王の僭称者】とボールロックが重勝式の賭けをしたのであり、ゴールがテーブルクロスの薄さの差しかない五角の勝負で、各馬一斉にスタートしたあと、クリーム色の若馬ボード・ボーイ・クロムウェルから生まれた、不世出の、唯一無二の、クラシックレースに出たことのあるエンカレッジ・ハクニー・プレートが、チャプレイン・ブラウント大尉がレイハニー【ダブリンの1地区】のセント・ダロッホ【村名】にもっている、目立たずに3番手につけていた、非常に低いオッズのセント・ドラマー・コックソンに2鼻の差で抜かれてしまったのだ。偉大なる若者、立派な若者、ワイン飲みの若者、常勝騎手ウィジャーのお陰だ！ あんたは最高だ！ 決して裂けることのない泥だらけの勝負服を着、紫色の帽子をかぶったあんたは、確かに俺たちの仲間だ。材木のような女のことでトップをとってきた、バンタム級の体重の他のいかなる奴とも違って。

モータークローズを着たこの人物【ソーンストーン】が、低い声を使って（これでも夫、まさしく夫なのです）、アダム氏【H.C.E】に関わること、つまり、親しくつきあっていて、酒を酌み交わすことのあるこの眼鏡をかけた飲み仲間について、すべてのサンデー紙に書かれてあることをささやいているのを聞いていたのは、2人の有害なる浮浪者であった（この酔っ払いたちは厄介者で、歯止めが効かなくなると、この泥炭掘りたちの声は我らの土地にこだまする）。1人はトリークル・トムという男で、キーホー、ドネリー、パークスハムのハム工場からフィンランド産の豚の足を盗んだことで投獄され、ちょうど出所したばかりであった。もう1人は彼の血を分け、母乳を飲み分けた兄弟フリスキー・ショーティーで（彼らに対して細やかな神経を使って言うなら、彼はちびで陽気であった）、競馬の予想屋をしており、牢獄船から降りてきたのだ。2人とも恐ろしく金に困っていて、シーフォース高地兵が若い娘に

言いよっている間に、機会があつたら金持ちをターゲットにして1ポンド金貨ばかりせしめようと、辺りをうろついていたのであった。

今見たこのトリークル・トムは、馬の産地の州にあるこの土地の、粗野で雑然とした行きつけの各酒場に、この日が来るまでしばらくの間姿を現さなかった（実際には、彼は普通の簡易宿泊所にしばしば出入りする習慣があり、そこでなれなれしくも、見知らぬ男たちの寝るベッドに裸で寝たのであった）。しかしレースの晩には、様々なアルコールを飲み、すっかりへべれけになっていた。飲んだものはヘルファイア、レッドビディ【安赤ワイン】、ブルドッグ、ブルルーイン【品質の悪いジン】などで、イングランドで最も好まれる草をベースにしたワインも口にした。飲んだ場所は、ザ・ダック・アンド・ドギーズ、ザ・ギャロッピング・プリムローズ、ブリジッド・ブルースターズ、ザ・コック、ザ・ポストボーイズ・ホーン、[40] ザ・リトル・オールド・マンズ・アンド・オール・スウェル・ザット・エイムズウェル、ザ・カップ・アンド・スターラップなどであった。そして彼はリバーティ地区、パンブコート、ブロックW.W.（どうして彼がそこを最良にしないことがあつたらうか）にある簡易宿泊所アバイド・ウィズ・ワンアナザーの十分に暖かいベッドに入った。そして母国語や人造語を使い、アアルコールの力によって、**馬が遅れてもやり抜くぞ**という言葉を反復しながら、いつものようにいびきをかいて寝てしまった。そしてこの薄ら寒い夜（苦悶する者よ！ 好色なる者よ！）、この小人物の一文無しの現金抜き取り執行人が不快な眠りの間に発した、福音書を読むお節介な坊主と都会の田舎者（彼ならば、彼らがカラレット、スカート、日よけ帽、カーネーションを身につけていたと思い、彼らのことを「少女たち」と呼ぶであろう）の話の本質である登場人物名は、部分的に（彼は3月15日【シーザー暗殺の日】以前の人物、別の言葉で言えば化石時代第3期以前の人物のように思えた。彼が暴れ馬に乗った黒人闘士の登場を待ち受けていたパンチ人形芝居の中で、ラビニア【ローマ神話中の人物】がメンスを海に流した時、彼にはケイトとともにビーハン【サッカーソン】がいた）度々次の者たちの耳に届く範囲内にあった。ピーター・コロラン（解雇されてしまった）、住居が定まっていない元個人秘書のオマラ（地元ではうどんこ病のリーサとして知られている）。彼女は凍れるアイルランドの土手の上の家の戸口で、ホームレス用の毛布にくるまり、男の膝や女の胸よりも冷たい運命の石の枕を使い、滑稽じ

みた姿で数夜をこれまで過ごしてきた。そして、不幸な星の下に生まれた海辺専門の大道芸人ホスティ（名前はちゃんとしている）。彼はパンもなく、バターもなく、自虐行為寸前で、自分が毒キノコの上に座っているのではないかと怪しみ、この上なく腹を空かせ、一般のあらゆることについて憂鬱な気分陥っており（夜のパーテンドーよ、君は婚礼用のミルクで彼に仕えてくれた！）、間に合わせのベッドの上で髪のかげれた頭をグイと引き上げ、どういうわけかこの国で許されるのであれば、是非とも誰かの拳銃をつかみ取りたいと思い、その方法と策を編み出そうとしていた。またこの時、厚意に満ちた1ペニーを受け取り、ドルキーやダン・レアリーやブラックロックを走る市街電車の路線のどこかで、両輪に身を投じることも希望していた。また彼は親の性質を受け継ぎ、この場で25セントの価値しかない、死を望む自分の頭に自らボトルを確実に一撃食らわして、安らぎと静けさの至福をうまく享受したいと願っていた。そして「マダム精神力」の力を借りて、18ヶ月以上もの間彼の知っているあらゆることを試み、その後サー・パトリック・ダズンズ病院からサー・ハンフリー・ジャーヴィス病院を経て、アデレイン病院の聖ケヴィンのベッド【うろ穴の意味】に入り込もうとしたのだが、[41]（癒しがたい嘆きの言葉の中、我々、つまりウェルズリー病院の不治の患者から、ザルガイの貝殻【巡礼のバッジ】のついた帽子をかぶった聖イアーゴまでの人たちを、善人ラザロよ、救い給え！）、結局はお粗末にもそれらを達成することは全く出来なかった。リサ・オデーヴィスとロシュ・モンガン（「魂の魂」【シェリーの詩の題名】的に言えば、共通点を彼らは数多く持っていた。即ち、次のような言い方が許されるなら、**敵対意識と気が滅入るような立ち昇る悪臭**であった）は、唯一の優しい母親的温かさをもつ起伏のある転げ落ちそうな寝台の上で、ホスティとともに、まさに茂みの中の小僧のような、からす麦畑の中の田舎者のような、あるいはソウ、荒地の中のヤクザ者のような姿で、皆には分かっていたことだが、スウィンバーンの【官能的な夢を見ながら】寝ていた。そして忙しく働く雑役婦（聖歌の効用を我々は渴望する！）が、ポットのふたに、ドアの真鍮のノブに、リンゴのように赤い生徒たちの頬に、たいまつ持ちの銃身に、まだ長いこと磨きをかけていない中で、他のいかなる者とも異なりキリギリスのような浮ついた心をもった彼、ベーコン付き目玉焼き好きの、ひよろ長の、清廉潔白な心の持ち主となった彼、即ち元気を取り戻したこの大道芸人（というのも、心地よい夜に夢を見、

雷の轟音を耳にし、仲間たちと朝一番にハムを食べた後、彼は昨夜と同じ人間ではなくなっていたからである）と、彼と同じ寝室で寝ていた、すっかり目の覚めた仲間たちは（我々の仲間たち、とパイロンは彼らのことを呼んだ）立ち上がり、「樽」という愛称を彼らが付けた豚小屋から足を引きずりながら出て、ダブリンの凍れる小村を横切った（彼らの地上を進むルートと休憩場所は、安っぽい筒状の錘重を用いて計測してみると、本書を書いている時の地下鉄の線路と駅との真上の線と点に奇妙にも一致していた）。クルース【古代ケルト人の、バイオリンに似た弦楽器】をつまびく音に歩調を合わせながら。この嘆く様な、低くうなる様な音色は、生き生きと、堂々と、軽妙にうねりながら、楽しく、跳ねるように、踊るように、お祭り好きの聖フィナティー王の従者たちの耳を愛撫した。彼ら従者たちはれんが造りの彼らの家の、甘いラズベリーの匂いが漂うベッドの中で、女のヒモの叫び声や、甘い香りのラヴェンダーや、素晴らしい体躯のポイン川の生きた鮭のことはほとんど頓着せずに、オラトリオに出てくる長く待たれるメシアの賞賛を更に得ようと、普段は規律にうるさい彼らの口を皆開いて、ただただ陥ってからまだそれほど時間が経っていない眠りの只中にいたのだ。そして【ホスティ一行は】この歌手がはめていた本当に称賛に値する入れ歯を質請けするという、人工装具に関わる目的のために、質屋の店舗で陽気に一休みし、その後宿場の中の職人宿、即ち、偉大なる音楽が自由に奏でられる聖セシーリア【音楽の守護神】の教区内にあるキュジャース・ブラス、即ち「親しき飲兵衛の穴蔵」に長逗留した。そこは、製作者（おそらくスチュアート王朝の最後の人物【ジェームズ2世】）の住む国境地域にもその類似品が作られたグラッドストーン首相の像がある敷地から、グリフィスの評定によれば、この国が定めた1000いや1リーグも離れていないところにあつた。そしてそこからこの話ははびこっていく。[42] 変人でペテン師の3人組に、もう1人——意図的に——自ら願い出て——明日の浮浪者であり、かつて様々な仕事に就いていたお上品な奴が入ったのだ。そいつは、ピュー、ちょうど給料をもらったばかりで、そしてケチなおしゃべりな奴らは（皆が知っていることについて誰が話すものか）、このいけ好かないお上品な奴がおごったジンやジンジャーという刺激物を口にしていた。そしてその後、強い酒によって養われた友情で顔を赤くしながら、鹿肉の入った軽食や、更にまさにイースターデーを祝ういくつかの食べ物を取り、このならず者たちは営業許可をもらっている

この建物から出てきて（ちびのブラウンが最初に。追記、私お金が欲しいの、どうか、送ってね、というある婦人の追伸文のようにへりくだったげげ現金抜き取り執行人が、嘆かわしくも彼らの列の一番後ろであった）、そして袖で笑いが漏れる唇を拭い、そして何とこの小人たちは、広範囲に大声で刺激的なスピーチをした（シンフェーン党員のように。シンフェーン党の歌を）。そして当然ながら、へぼ詩人の世界は、バラードになっていくが故に、ますます豊かなものになっていった。そしてこのバラード詩人に対して、最も不快な吃音者ではあるが、世界がこれまで明らかにしなければならなかった最も魅力ある、神の化身である人物についての物語詩を、この惑星における歌の中にもたらしたことで、世界の歌の業界は賛辞を贈っている。

この、より正確には、愛しい彼女でありもしくは仲間である——私にとっては——歌は、立法者（自由なる森！木こりよ、助命したまえ、助けたまえ！）になるはずであった人物の記念碑の影響の下、まず、リフィー川がざわめき、ホースの丘がこぶを作っているところまで流れて行き、更にはレンスター地方のあらゆる人々があふれんばかりに集まり、その幻影的な地域の隅々にまで居住しているところまで流れていった。そして我々のリフィー川の両サイドに住む人々（イギリス本土の少数民族【アイルランド人】について、および、ウォトリング通り、アーニング通り、イクニルド通り、ステイン通り【いずれもイギリスの古代ローマ時代の街道】を**通**って、ハームズワース社【新聞社】の一部の雑文書き、北部のトーリー党員や南部のホイッグ党員、東部の年代記者、西部の貧民救済法施行委員とともに、合図して止まってくれた貸し馬車で旅をしたことのある人々について言及するのはやめておこう）、その仮面やらその顔やらで簡単に類別出来る、あらゆる階層の、あらゆる地域の（ワインショップもココアの喫茶店も、横の穴からこぼれ落ちるくらいに注いだ）、心を1つにしている超群衆としての人々、即ち、手を半ズボンのポケットに突っ込んで歩き回るほか芸のない、乳離れのしていない、気取った大ボラ吹き、つまり、1片のパンを求めている、3つのウールの玉模様をついたポプリン地の服を着て、怠学者補導官と相並んで歩いている、がたいが大きな楽天家の、カットパス町からやって来たダブリンの若者たちから、次のような人物たちのところまで流れていったのだ。忙しい根っからの紳士。長いほおひげを生やした2人のセールスマン、この2人はダリーの店【ダブリンのクラブ】の方に昼食をとりに行き、ラトランドの荒地でシギを撃

ったり、マガモを撃ち損ねたりしたことから新鮮な気分になって、冷笑を取り交わしている、[43] 2輪馬車に乗って団体でヒューム通りから出かける婦人たち、酷使されている運搬人たち、そのうちの一部のボンクラの荷運び人夫はモス・ガーデンズ【18世紀にパーソロミュー・モスが建てたロタンダ産婦人科病院内の庭】近くのクローパーの野からさまよい出てきた、スキナーズ小路からやってきたオペレート・ファーザーズ【宗教団体】の会員、レンガ職人、タビネット織りの服を着、煙草を吸い、配偶者と犬を連れているフランダース地方の者、手に数本のノミをもった老いた鍛冶屋。試合に臨む棒術師、羊炭疽病にかかった少なからずいる羊、紺色の上着を着た2人の学者、シンプソンズ病院から出てきた、生活に困窮した無一文の4人の貧乏紳士、トルココーヒーとオレンジジュラブを、安い店の入り口で未だ味わっている恰幅のいい奴と気取った奴、ピーター・ピムやポール・フライやそれからエリオットや何と、アトキンス【4人とも当時のポプリン製造業者の名の一部】、彼ら年金受給者は、狩をする時、よせばいいのに忘れずに処女のような乗り方をするので、魚の目の水ぶくれ状態に大いに苦しんでいる、カトリックのイースターのことや、剃髪についての問題や、ギリシャの合同教会信徒や、奴らの毛をむしり取れ、といったことを考えている特定贖罪主義者である受給者資格聖職者、窓から顔を出している頭にレースの垂れ飾りをつけた1、2、3、4人などなど。そして果ては、質屋で禁酒の誓いをたてたばかりなのに、仕立屋ターリーのところの金髪の娘の通夜から戻ってきた時には、明らかにアルコールに飲まれてしまった老いた善人たち、3本と更にもう1本のワインの大瓶のことを考えている愉快的郵便配達人、ウィーヴァーの私設救貧院から来た幼い物書き、この半人前の坊やはウィーヴァーに、曇った表情のこの完成した女性のお情けの庇護に、子供として、後に司祭となる人物として、クイーハ・オレアリー【19世紀の詩人ジョン・キーガンの詩のタイトル】として、徹底的にしがみついている。このようにこうした戦いの矢はあちこちを飛び回った。実際そうであった（国民は凝視したいと思っている）。そしてこのバラードは、テオセーボ【プロヴァンス語でハサミムシの意味】作『棺に入ったパンチネッロの落下』に影響を受け、フェリブリージュ【プロヴァンス語の保存・純化を目的とした詩人・作家の結社】風に短く区切られた韻律が用いられ、白い広幅の紙片に刻印が押され、過度に粗雑な版木によって見出しがつけられ、デルヴィルの印刷所で密かに印刷され、まもなく立ち騒ぐ

風や吹きすさぶ嵐に乗って白い街道や茶色の裏通りにその秘密をはためかせ、アーチ道から格子門へと、黒い手からピンクの耳へと、村から村へと叫びながら、スコットランド人とピクト人とが住む、昔5つに分かれていて今4つに分かれている緑の合衆国を渡っていった——ただ願わくは、それを否定する者の髪が汚物の中でこすられてしまうように！ ホルン奏者であるデラニー氏（デラシーかもしれない）は、熱狂的愛好者からの完璧な賞賛の嵐を期待しつつ、楽器の中でもただ1人冠をつけた王であり、ピゴット楽器店の中で最も純粹なる音色をもち、**空に高く鳴るリュート**であるフルートを吹いて、ケルトの人たちが気づいたように、普段よりも一層バルシファルの様な温和な同名人【パトリック・デラニーのこと、フェニックス公園殺人事件に関与】らしくなって、思いのまま上品に、しかしあたりにつばを吐く前に、彼の威厳を表す加筆した旋律を奏でた。そしてその旋律に合わせて、そのリーダーとしての野性的なこんもりとした髪に、[44]頂きが雪のように白い巻き毛をまじえながら、指揮者であるヒッチコックは、声をあげた人物【ホスティ】のために、皆さん、**宮中ではお静かに！**（我らのメイポールを、もう1度昔彼が立ち上がったところに立たせよ）と促すために、タクトの高さにまで毛羽立った帽子を上げ、聖杯に仕える仲間【合唱隊】に合図した。そしてその歌はそこで歌われ、コーラスとなり、古い料金所のそばのセント・アンドリュース通りの教会で、洗礼名を授かったのであった。

そして国のあちこちにその詩は流れて行った。そしてこれはホスティが創った詩であった。語られていった。少年少女によって。スカートと長ズボンを履いた彼らによって。我々の語る真実は、詩となり人々の心を動かし、ストーリーの中で生きていくであろう。ここにその詩行のレフレーションの箇所を掲げる。中には彼【詩の中の人物、H.C.E】をヴァイクと認識する者もいる。また彼をマイクと論じる者もいる。またリンやフィンと呼ぶ者もいる。また牽引力のある偉大なるダンロップとして、法として、鮭として、ゴン【ゲエティー座の支配人であるマイケル・ゴンのこと】として、ギネスとして、彼をたたえる者もいる。また熊とするにふさわしい人物とする者もいる。またパースとか、コルとか、ノロとか、ソルとか、ウィルとか、ウィールとか、ウォールとかいう洗礼名をつける者もいる。しかしながら私は彼を、パース・オライリーと分析解釈する。そうでなければ、彼はいかなる名前でも呼ばれることはないであろう。みんな一緒に。サア、詩はホスティに任せよう、

髪に霜が降りたホスティに。詩はホスティに任せよう。というのも、彼は詩を創る名人だからだ。詩、ソウ、詩、あらゆる詩の王だ。あなた方はその詩を耳にしているのか（耳にしている者もいる）。我々はどこで耳にしているのか（耳にしていない者もいる）。あなた方は耳にしたことがあるのか（耳にしたことがある者もいる）。我々はどこで耳にしたことがあるのか（耳にしたことがない者もいる）。その詩はやって来る、その詩はあふれている！ パチパチ、ポチポチ！（皆が拍）ガラスが割れる時の音のように。この（パチパチパチパチパチスバラシイパチパチパチキイテミロパチパチパチブラボーパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ）

聞け、素晴らしい

音楽、始め

[45]ハンプティ―・ダンプティ―という男のことを聞いたことがあるか。

どのように奴がガラガラと転げ落ちて行ったかを。

そしてどのようにオリバー・クロムウェル卿のように縮こまったかを。

マガジン・ウォールの小丘のそばで。

（コーラス）マガジン・ウォールの小丘で、
こぶやらヘルメットのような日よけ帽やらを身につけて。

奴はかつてダブリン城の王であった。

今は腐った古びたパースニップ【セリ科の植物】のように足蹴にされている。

そして閣下の命によりグリーン通りから送られるだろう。マウントジョイにある刑務所に。

（コーラス）マウントジョイにある刑務所に！
奴を閉じ込めろ。そして祝おう。

奴は我々を悩ますあらゆる企みのくく黒幕だった。

民衆にはなかなか来ない列車と完璧なる避妊具、

病人には雌馬の乳、1週間のうち7日間のアルコール抜きの日曜日、

野外の愛の行為と宗教の改変。

（コーラス）そして宗教の改変。

形はひどい。

アア、奴には何故そんなことがうまく出来ないのか、とあなたは言う。

請け合って言う、我が素晴らしい、愛する酪農場主よ。
 キャシディ家のあの猪突猛進の粗雑な男【パッチ・キャシディはアメリカ開拓時代の強盗団の頭目】のように、
 あんたのバターは全部あんたの角にあるからさ。

(コーラス) 奴のバターは奴の角にある。

バターは奴の角！

(繰り返し) いいぞ、ホスティ、髪に霜の降りたホスティ、
 着ているシャツを変えろ。

詩を創れ、あらゆる詩の中の王を！

吃音をもっている者、吃音者よ！

我々にはに肉チョップや、チェアーや、チューインガムや、
 チキンボックス【水痘】や、チャイナ【磁器】で出来た罇を、

あまねくこのおべっか使いのセールスマンから手にした。
 [46]地元の若者たちが、奴に「みんなを騙すハサミムシの
 H.C.E」というあだ名を付けても不思議はない。

チムデンが初めて皆の話に加わった時に。

(コーラス) 下等な酒場を開いている。

下がり気味の商売がもっと下がるのに。

奴は贅沢な自分の酒場の店で、とても快適に過ごしていた。
 しかしすぐに我々は、奴の馬鹿話やごまかしやでたらめを
 火にくべるだろう。

そしてまもなく執行官クランシーが奴の無限責任会社を
 閉鎖するだろう。

執行官のぐうたらな手下が奴の戸口に立つだろう。

(コーラス) ぐうたらな手下が奴の戸口に。

それから奴はただの浮浪者になるだろう。

甘美な不幸が波に乗って我々の島に押し寄せる。

あのハンメルフェスト【ノルウェーの港町】のヴァイキング
 の帆船が。

そして神に呪われた日となるのだ。ダブリン湾に
 黒褐色の軍艦が現れた時に。

(コーラス) 奴の軍艦が現れた。

港の砂州に。

どこから来たのだ、とプールベッグ【ダブリンの灯台名】
 が吠えると、奴はコペンハーゲンと怒鳴る。エビを俺にく

れ、妻と家族にも。

フィンガル、マック、オスカー、オネシモ【聖人となった
 逃亡奴隷】、バーギヤース【背中の丸い人物、の意味】、
 ボニフェース【居酒屋の主人、の意味】、

これらが、駱駝のように背中にこぶをもった、ノルウェー
 人としての俺の名前だ。

そして駱駝のような老いたノルウェー人の男というのが、
 実際の奴の姿だ。

(コーラス) 駱駝のような老いたノルウェー人の男。

フン、奴はこうなのだ。

もっと大きな声を出せ、ホスティ、大きな声を出せ、この
 野郎！ その詩万歳、創った詩万歳！

庭で真水をくみ上げている間に、

あるいは、『ナースィング・ミラー』【雑誌名】によれば、
 猿を崇めている間に、

我らの太った異教徒ハンフリーは、

大胆にも少女を口説いたのだ。

(コーラス) 誰を口説いたって？彼女は何をするの
 だろう！

この雑役婦は処女を失うのだ！

[47]奴は自分を恥じるべきだ、この干し草頭の老哲学者は。
 あのように不埒にも、彼女を自分のものにしようと意気込
 むとは。

けしからん、一番の問題児だ。

あの古びた動物園にいる動物の中の。

(コーラス) いちゃつきめ。

新品同然のノアの方舟の中でどんちゃん騒ぎだ。

ウェリンドン記念碑の近くに馬車に揺られてやってきた。

我らの悪名高きカバは。

この時誰かが馬車の後ろのタラップを下げ、

そして奴は火打石銃兵の餌食となったのだ。

(コーラス) 賃貸料を滞らせたまま。

奴に6年の猶予をやれ。

奴の純粹無垢ないたいけな子供が大変哀れだ。

しかし、奴の正当なる連れ合いに用心せよ！

あの女が老いたエアウィッカーを手玉に取っている時、
 芝生に何匹もの相争うハサミムシがいらないだろうか。

(コーラス) 芝生に大きなハサミムシ、
今まで見た中で一番大きな。

【ホステイヤーは】ソフォクレスだ！ シェイクスピアだ！ 孤高のダンテだ！ 無名のモーゼだ！

その後我らはケルト人の楽隊と自由な取引をし、大衆集会を開く。

スカンジナビア人の勇敢なる子孫を貶めるために。

そして我々はオックスマントウンに奴を葬ろう。

悪魔とデーモンとともに。

(コーラス) 耳が聞こえず口もきけないデーモンとともに。

そしてすべての奴らの遺物とともに。

そして国王の臣民や馬すべてをもつても、

奴の亡骸を復活させられない。

コナハトにも地獄にも真の呪文はないから。

(繰り返しで)カインのような人物を起き上がらせる呪文が。

(注)

『フィネガンズ・ウェイク』の原典は、James Joyce, *Finnegans Wake* (New York: Viking Press, 1947)を使用した。本文中の[]内の数字は、*Finnegans Wake*の原典のページを表す。【 】内の

日本語は、該当箇所の内容を筆者なりに解説したものである。()内の日本語は、原典の()内を訳したものである。太文字の箇所は、書名と曲名を除いた原典のイタリック体の箇所である。原典の44ページにある楽譜は省略した。参考文献としては、以下の書を使用した。

参考文献

1. Anderson, John P. *Joyce's Finnegans Wake: The Curse of Kabbalah* vol. 1. Boca Raton: UniversA.Lublishers, 2013.
2. Campbell, Joseph, and Henry Morton Robinson. *A Skeleton Key to Finnegans Wake*. rpt. New York: Viking Press, 1944.
3. Glasheen, Adaline. *A Third Census of Finnegans Wake*. Evanston: Northwestern University Press, 1963.
4. McHugh, Roland. *Annotations to Finnegans Wake*. Revised ed. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1991.
5. Mink, Louis O. *A Finnegans Wake Gazetteer*. Bloomington and London: Indiana University Press, 1978.
6. Rose, Danis, and John O'Hanlon. *Understanding Finnegans Wake: A Guide to the Narrative of James Joyce's Masterpiece*. New York: Garland Publishing, 1982.
7. Slepon, Raphael, ed. *Fleet Search Engine in The Finnegans Wake Extensible Elucidation Treasury (FWEET)*, Website.
8. ————. *Glosses of Finnegans Wake in The Finnegans Wake Extensible Elucidation Treasury (FWEET)*, Website.
9. 宮田恭子訳、『抄訳、フィネガンズ・ウェイク』集英社、2004年
10. 柳瀬尚紀訳、『フィネガンズ・ウェイク』I、II、III、IV、河出書房新社、1991年

ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』 第1部第2章の概要 (30. 1~47. 29)

大島由紀夫

(東京海洋大学名誉教授)

要旨： ジェイムズ・ジョイス著『フィネガンズ・ウェイク』の第1部第2章30ページ1行目から47ページの29行目までを訳出した。逐語的に訳した箇所もあるが、内容をくみとりながらその主意を表した箇所もあり、「概要」といった題名にした。訳出した本文は、「ハサミムシ」というH.C.Eのあだ名の由来、H.C.Eが少女たちの排尿を盗視したという噂についてのH.C.EのCadへの告白、およびその噂の拡散の様相という、この小説の筋立ての基本となるシーンを取り上げている。

キーワード： 『フィネガンズ・ウェイク』、第1部第2章、概要